

AIDSネットワーク横浜 ニュースレター

発行：特定非営利活動法人 AIDSネットワーク横浜

〒231-0015 横浜市中区尾上町 3-39 尾上町ビル 9F

TEL：045-201-8808 fax：045-201-8809

ホームページ <http://www.netpro.ne.jp/any/>

e-mail：any@netpro.ne.jp



12月1日は「世界エイズデー」…イベント案内
テーマ：U=U 知ることからはじめよう
会場：JR関内駅北口広場
日時：12月1日(日) 10時～12時

今年度の世界エイズデーのイベント案内です。

横浜AIDS市民活動センター主催のイベントにANYも参加します。

10時45分から11時15分まで横浜市消防音楽隊の出演があります。

街頭にてパンフレット等の配布を行います。

お手伝いいただける方は、当日の9時30分に横浜AIDS市民活動センターにお集まりください。よろしくお願いします。

治療法の進歩により、HIV感染の早期把握により、早期治療の開始・継続によってエイズの発症を防ぐことができるようになりました。HIVに感染していない人と同等の社会生活を送ることができるようになっていきます。

近年では、HIV治療を受け、血中ウイルス量を検出限界値以下まで最低6カ月以上継続的に抑えることで、HIV陽性者からは性行為によってHIVが感染することはないことも確認されています。このことは、Undetectable（検出限界値未満）＝Untransmittable（HIV感染しない）、略してU=Uと呼ばれています。

日頃の電話相談でも思いますが、まだまだHIVの感染経路や治療法についての情報が広く伝わっていないと感じます。

科学的な情報を知ること、安全な予防行動につなげることができます。「感染したかも？」という不安の払拭は、正しく知ることを通してしか行動変容につながりません。

正しくHIVを知ることがむやみな不安を和らげます。そのような機会になるよう街頭活動に参加します。

世界エイズデー
in Yokohama 2024

12/1(日)

10:00 - 11:30
演奏 (10:45 - 11:15)
JR 関内駅北口広場

横浜市消防音楽隊の
奏でる音楽とともに届ける
U=U のメッセージ


主催：横浜 AIDS 市民活動センター

第31期ボランティア学校&事例検討会学習会 いろいろな性 安達 倭雅子さん(一社“人間と性”教育研究協議会)

9月14日、安達さんを迎えてボランティア学校&事例検討会学習会を開催しました。

安達さんは長年の子ども電話相談、そして現在は埼玉子どもを虐待から守る会の電話相談員を30年されています。内容は多岐に亘りましたので一部を報告します。

からだを大切にすることは命を大切にすることと同じ

5歳児の性教育を30年、某幼稚園で行っている。からだって大切ということはどう子どもたちに伝えるか。いのちって何だろう？いのちってどこにある？と、聞くと子どもたちは、

「腐ったものを食べない」「車にひかれない」「運動する」など口々に答えます。いのちを大切にすることは、からだを大切にすること。からだを大切にするためには、からだの機能を知っていること。科学的に知る、その際性器や性機能を除外しないこと。

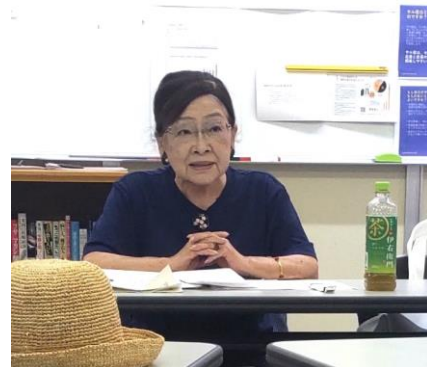
「生理痛は遺伝する」と、迷信を中学生は信じている。親からの繰り言を聞かされ心理的に招き寄せている。「知は力」である。生理を学ぶことで痛みは少ない、痛み止めを飲んでも良いと思っていると痛みも少ない。

からだの権利について

性は人権と言われるが、なかなかぴったりとこないと感じる人もいる。性は人権ということとは、「からだは人権である」ともいえる。そのことを示している「からだの権利」についてのお話。「生命（いのち）安全教育」が昨年度から全国の学校で始まっている。子どもたちにNOを言おう、という教育なのです。NOも大切だけれど、YESも言える必要がありますね。「はてな？？？」もNOに入ります。これは子どもたちに自分のからだを守る方法を教える教育であるが、性教育の一部としては不十分です。

「からだの権利」とは何ですか？

1. からだのそれぞれの器官・パーツの名前や機能について十分に学ぶこと
2. 誰もが自分のからだのどこを、どのようにふれるかを決めることができる
3. からだは自分だけの器官であり、誰かが勝手にさわることはゆるされない。
4. からだが清潔に保たれて、ケガや病気になったときには治療を受けることができる。
5. こころとからだに不安や心配があるときには、相談できるところがあり、サポートを受けることができる。
6. 5までのことが実現できてないときは、「やってください」「やめてください！」と、主張することができる。



包括的性教育は、NOも言える、YESも言える教育なのです。安倍晋三氏が亡くなって、統一協会と政権の関係が明らかになりました。統一協会の教義に反することはできないということが教育現場に持ち込まれた。

ジャニーズによる男子への性加害が明らかになった。からだを守る、からだの権利の教育が届いていなかった。性被害を受けた子どもが悪いのではなく加害者が悪いがその状況が長年、放置されてきた。

プライベートパーツはからだ全身であるが、性器、乳頭、口、肛門は、いのちをつくることに関係する特別なところ。相手との関係性によってもプライベートパーツは変わってくる。自分で自分のプライベートパーツは決めて良い。

電話相談に見る子どもたちの声

電話相談に子どもたちから「妊娠したかも？」とかかってきます。妊娠は困るとしても「そのお相手さんとそういう関係になれて良かったと思？」と聞くと、「何のこと？」、って聞くから、「性交したこと良かったと思っている？」と言うと「おばさん、エロイんだね。したくてしたんじゃないよ」との答え。「愛しているからって言うからしたんだ」、じゃあ、避妊はどうしたのと聞くと「愛しているから大丈夫と言った」の答え。「愛している」という名のもとでの性行動、「愛している」は大きな課題です。子どもたちは恋愛に対する意識が肥大しているという報告もあります。



第10回国際エイズ会議横浜……1994年前後を振り返って

中野久恵

今から30年前に当地横浜で第10回国際エイズ会議が開催された。当会は、横浜エイズカウンセリングネットワークとして1993年2月に発足した（その後1995年に現AIDSネットワーク横浜に改称）。国際エイズ会議開催の約1年前になる。その当時の日本のHIVエイズを巡る情勢と横浜での国際会議について振り返ってみたい。

1994年8月、パシフィコ横浜で開催された国際エイズ会議はアジアの地では初開催である。

当時の日本のHIVエイズを巡る情勢では、薬害エイズ裁判（1989年提訴）が原告匿名という状況で大阪と東京で始まっていた。この裁判は、非加熱血液製剤を投与されHIV感染した血友病患者が国の責任を巡って提訴したものである。厚生省サバイランス委員会は1985年に同性愛の患者を日本初の患者と公表した。しかし、これは情報の操作があった。すでに血友病患者の中にHIV感染者が把握されていたにもかかわらず隠されていた。

また、国はエイズパニック（注参照）を受けてHIV感染者患者を取り締まりの対

象とするエイズ予防法を1989年に公布、施行した。

1985年当時の日本は、感染しているという事実が世間に知られるととんでもないことが起きるということをマスコミ報道や行政の対応で身をもって感じていた。患者を社会からあぶりだして排除していった。科学的に感染経路が特定されても人々に偏見は残されたままだった。それは、現在にも引き継がれている状況がある。

世界では、1989年のモントリオールでの国際会議で国際エイズNGO連絡会（ICASO）、世界陽性者ネットワーク（GNP+）が初めて共催団体となった。NGOはエイズ対策のパートナーであるとうちだされた。

1990年のサンフランシスコでの国際エイズ会議は、ヨーロッパの著名な研究者がボイコットするという波乱があった。その理由は、アメリカ政府はエイズ患者の入国を認めないとしていたから。患者の人権を尊重できない国での開催への抗議としてボイコットされた。

その頃、日本での開催が決まる。日本は、研究者と医師だけが集い科学的なエイズ会議を行おうとしていたようだ。その

状況を見て、WHO、国際エイズ学会（IAS）、GNP+、ICASOが日本に引導を渡した。

それは、NGOや患者たちはエイズ対策の仲間であり、世界のNGOや患者組織を受け入れる窓口を日本の国際エイズ会議組織委員会につくこと。その代表は日本のNGO代表を充てること。それが出来なければ日本以外で行うという通告だ。

そして、引導を渡された日本の取り組みとして池上千寿子さん（ふれいす東京）が要請されてコミュニティリエゾン部会長に就任、NGOの代表として組織委員会の中で横浜開催に向けて奔走された。その活躍ぶりは私の記憶にも残っている。

PWAパーソンウィズエイズ小委員会では大石敏弘さん（当時24歳）がスポークスマンを務められた。大石さんは、1993年のベルリンの国際会議で実名を公表し、横浜ボイコットの動きはあったが「僕たち感染者のために日本に来てください」というスピーチもありボイコットは回避された。

注：エイズパニック

1986年松本事件。フィリピン国籍の女性が帰国後に感染が分かり女性が働いていた店などをマスコミが報道した。1987年神戸事件。エイズサーベイランス委員会が「我が国初の女性患者」と二次感染予防の口実で発表した。それによりマスコミ報道が過熱し女性のプライバシーが暴かれた。1987年高知事件。エイズサーベイランス委員会が「出産を控えた女性の感染」を

当時、そのような事実があったことは知る由もなかったが池上さんの報告（『季刊セクシュアリティ87号』）により知ることができた。

私は、8万円の会議参加チケットは買えずに臨港パークで開催されたキルト展示や産業貿易センターでのAIDS文化フォーラムに3日間通った記憶がある。

当時、日本のNGOは各地に誕生し電話相談やキルト巡回展などが開催されていた。

活動に熱気を感じた頃だった。ANYは1993年12月に土曜日電話相談を開設している。

1992年～1993年頃、「日本の感染爆発前夜」と言われた時期のANYの始動であった。

臨港パークでのキルト展示



公表。それにより感染者の出産について報道が過熱した。この女性は薬害エイズにより感染した夫からの二次感染であった。

運営委員会報告

- 出前講座の委託…横浜エイズ市民活動センターより8校の委託を受注しています。来年1月～3月に実施予定です。
- 会務の運営等について
 - ・ 日々のメールのチェック、HPの更新、電話相談に係る市への連絡報告等、諸々の作業を白井聡さんに業務委託の形でお願いすることにしました。
 - ・ 24年7月からの会員の活動に対して、1回あたり1000円の活動費（食事代含む）を支払うことを決めました。但し、ボラ学校と総会への出席については除外します。交通費支給は従来通りです。
- 新規入会者紹介・・・9月入会 末永くどうぞよろしくお願いします。
 - ・ 平岩享子さん（中区在住）滝口理恵さん（南区在住）

